



Title	医療通訳（医療言語学によるイノベーション）はグローバル社会との「共創」によって世界の扉を開く
Author(s)	林田, 雅至
Citation	Co*Design. 2017, 1, p. 85-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60555
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

医療通訳（医療言語学によるイノベーション）は グローバル社会との「共創」によって世界の扉を開く

林田雅至（大阪大学COデザインセンター）

ポルトガル語圏文献学・キリスト教図像解釈学・宗教民俗学を専攻する学際研究者（ポルトガル語学・文学）。
ポルトガル・リスボン科学アカデミー（外国人会員）。

Linguistics Innovation leads to Open Innovation through co-creation with Global Society

Masashi Hayashida
(Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

キーワード _____ 言語学イノベーション、双方向運用能力、オープン・イノベーション

Keyword _____ Linguistics Innovation, Interactive competence, Open Innovation

1 | Communication とは

まずは、Communicationとは元来どういう「意味」かを考えてみましょう。

《Communicationの語源にあたるラテン語 *communicare* は、語形成上 *company* (同じ釜の飯を食らう)と同様の形式に支えられ、この場合“*munus*を分かち”というのが原義である。現代医学用語である *immunodeficiency* (免疫不全症)にも *munus* は入っている。シェイクスピアは戯曲『間違いの喜劇』(16世紀末)の中で「夫君の力強さを分かち (*communicate*) ことを待望する」夫人の台詞に使用している。中世欧州で *munus* は「キリストの血と肉 (聖なる贈物)」、勿論「ブドウ酒とパン (食糧)」を意味し、祝祭の「聖体拝領 (*Corpus Christi*)」を *commune with God* (霊的な交わり)と捉えている。

一方、*Acquired immunodeficiency syndrome* (後天性免疫不全症、略称 AIDS) について、欧州中世末期、猛威を振るった黒死病の場合、顕微鏡発明は未だ遠く、可視化されないペスト菌は、神罰の象徴=矢として天上から飛来し、人々の肉体を射抜き、そして人々は *munus* (神の試練=疫病)に感染すると考えられた。つまり、*munus* は正負の両義性を付与されている》¹⁾

なお、*Communicable* は *infectious*、*contagious* と類義語で、その意味の相違を押さえておくのも重要であると考えます。調べて見みよう。

また、同接頭辞 *com-* を附した *commence* という英単語がありますが、意味を知っていますか？

一般的な *begin* に対して、フォーマルな語彙として、開廷するとか、試験を開始するなどに使われる動詞です。11世紀 *The Norman Conquest of England* によって北仏言語の導入、ラテン系言語が使用されるにともなって、入った語彙で、元々俗ラテン語 (話し言葉のラテン語) **Cominitiare* (類推形) が基になっています。分解すると、*com+in+itiare* (= *itus* [*ire* の過去分詞] の動詞化) ですが、原義は「宗教的儀式に参加する」。initiate, initiation も入っています。in の反対語 *ex+itus=exit*。なお、ラテン系言語：仏語 *commencer*、ポルトガル語 *começar* は英語の *begin* に相当する一般的な語彙です。因みに、専門家の間では、*Vulgar Latin* の翻訳語「俗ラテン語」は、仏文学者・言語学者 新村猛 (1905-92) の「拙訳」として有名です。日本は「翻訳誤訳」が定着する厄介な「翻訳文化土壌」があります。その一例です。

2 | 自動翻訳機は登場するのか

さて、現代語 *Communication* について、国際コミュニケーション・ツールの代表格、英語は万能であると思われてきました。2004年製造業に非正規雇用を導入し、日本企業のグローバル化は一気に加速し、2008年リーマンショック (金融危機) によって、それまで一国市場主義であった「戦後の市場経済

の枠組み」が、中国・インドなどの人口を標準とするグローバル市場規模に拡大し、必然的に労働市場における多民族化(多言語・多文化化)が促進されました。国際コミュニケーション・ツールとしての「貿易・通商・経済」英語の位置付けはまだまだ変化はないものの、人々の生活レベルの多言語化は飛躍的に進んでいます。国の内外で英語圏だけに限定されない「国際結婚」が進むことも、家族内の多言語化現象を拡大させています。こうした経緯から、Language Barrier Free (ことばの壁を越える)を可能にするものが、英語だけではカバーできない状況が生まれ、「外国語=英語」からの脱却をはかる必然性に直面することになりました。²⁾

拙稿(2012)「医療をめぐるLanguage Barrier Free～ことばの壁を越える～」サイトは「ことばの壁」について、この25年ほどの経緯をまとめたもので、最後に2012年非英語圏で初開催となったSibos(世界金融会議、大阪)に向けて試行開発した「医療アプリ」を紹介しています。一般社団法人臨床医工情報学「コンソーシアム関西」にも多大なる協力を仰いで、開発に漕ぎ着けたもので、全17言語をカバーする「多言語問診票」。6000人の参加者があった「閉じられた」会議がペーパーレス、タブレット対応仕様で開催されました。大阪観光局による情報発信6言語(英語、中国語[簡体字・繁体字]、韓国・朝鮮語、タイ語、フィリピン語)で提示、世界デビューを果たしました。因みに、安宅コレクションを収める、世界的に有名な「東洋陶磁美術館」は、会議開催期間中10月下旬から11月初旬にかけて多数の私人銀行家が訪問し、知人の館長出川哲朗氏によると、一時期館内は仏語が飛び交う異常事態になったとのこと。仏語案内アプリを開発して欲しいと要請されたことがありました。

人は病を得ると気弱になり、外国語での遣り取りにストレスを抱えます。我々は個体差はあっても、一般的に11歳頃に「第一使用言語」としての母語確立の時期を迎えます。抽象的な思考が可能となり、母語は自己同一化の最大の武器となります。体調不良など悪条件の時に、母語対応を可能にするツールがあれば、鬼に金棒です。

目下、脳神経外科の立場から、人工知能の研究は「日進月歩」(ならぬ「秒進分歩」)で進んでいるとは言え、2020年東京五輪に向けた「自動翻訳機」の開発は2030年に延期され、やはり当面、「人間」通訳者の存在は不可欠ということになりました。

3 | Communication はヒトの命を救う

現在、ISOである国際標準化機構は、グローバリゼーションを考慮に入れて、所謂「欧州言語共通参照枠」である欧州の共通基準に沿うB2(中上級)以上の「双方向言語運用能力」を備えた、コミュニティにおける通訳者・翻訳者としての人材の国際標準化の提案を行なっています。「地球市民(グローバル・シチズン)」として「能力ある人材」は、ある国からまた別の国に対して、母語対応による外国人支援において、現場へ直接駆け付けるにせよ、携帯電話など遠隔通信によるにせよ、「速く、上手く、

正確に「communication」することによって、人命貢献できることになるでしょう。

ここでは体験談を一つ翻訳して紹介しましょう。

この原文はポルトガル語で、2016年5月26日午後1時44分、ヌーノ・ジュディセに宛てたメールの内容です。

《傑作現代詩集・ヌーノ・ジュディセ著(2015)『偶然の航海』(スウェーデン女性による創業・ドンキホーテ社創立50周年記念出版、リスボン)に捧げる「私の2015年偶然の航海」(翻訳)

林田雅至

親愛なる友人ヌーノ・ジュディセよ、

今回は、あなたの勤務先・公益財団法人カロウステ・グルベンキアン(アルメニア石油王)³⁾の機関誌『文学・対話』2巻を郵送してくれて有難う。昨日勤務先で受け取りました。

来春3月リスボンでの再会を楽しみにしています。

私の2015年偶然の航海：

2015年3月、私は偶然、マドリードの国際空港で、ドイツ航空会社の一人の副操縦士による不条理な自殺に巻き込まれた、予期せぬ壊滅的な事故に遭った犠牲者の妻とその娘に出会ったのである。二人は当惑し、あたかも「苦しみの聖母マリア」⁴⁾のように、十字架刑に処せられたようでもあった。事故現場近くの空港行き飛行便の離陸ゲートへ向う「地下鉄」を探していたのである。パイロットを失い、操縦不能となった飛行機が、真逆さまに、悲劇的に墜落した事故現場。二人は突然呼び出され、なされるがままに、手には唐突に真っ白なボーディング・チケットを持たされた。ボーディング・チケットには最終到着地が手書きで書き込まれ、そこで、見る影もない遺体との虚しい対面をすることになる。死体の身分証が残されていたとは言え、恐らく、二人だけが本人自身であることを確かめることができる。私は思い切って、ゲートへ向う「地下鉄」を指し示した。彼女らとともに「地下鉄」に乗り込むや否や、まるで予約していたかのように、二人は座席に腰を下ろしたがった。次の駅に到着するまでの僅かな時間、母親は回復のために一息をとにかくつきたかったのだ。恐らく明け方まで一睡も出来ず、疲弊し切っていたのである。娘は、顔を真っ直ぐ上に向けて、天を仰ぎ、その魂は、屹立したアルプス山脈の真っ白な頂きからぶら下がっていた。次の駅で、私たちは別れ、それでも、二人は「地下鉄」指示の御礼と別れの挨拶してくれた。私は既に次の空港へ向う飛行機の離陸ゲートへと向っていたのである。

さよなら、再会幸甚。

4 | コミュニケーション・メカニズム考

次に通訳(翻訳)コミュニケーション・メカニズムを概観しておきましょう。



Aの立場から:

- ① A: 母語(第一使用言語)(語彙・文法など)で、B: 外国語(語彙・文法など)の理解を試み、解釈し、外国語で「発話」する。
- ② B: 外国語(語彙・文法など)を、A: 母語(第一使用言語)(語彙・文法など)で解釈し、通訳(翻訳)して外国語のBの「発話」の意味を理解する。

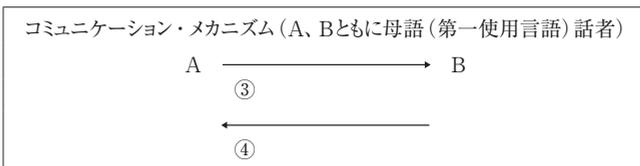
「外国語運用能力」の優劣: ②>①

なお、これは、Aを外国語学習者(話者)と考えた、一般則でもあります。

外国語(学習)辞典が、英和辞典、中日(和)辞典、仏和辞典、独和辞典などから始まり、それに比して一般的に和英、日(和)中、和仏、和独などが相対的にボリュームが少ないのも、外国語学習が原則、その対象言語を学習するのが第一義になっているからです。我田引水、16-17世紀来日したポルトガル人宣教師が編纂した辞典も、ポルトガル人が日本語学習するための「日葡辞書」でした。

「双方向外国語運用能力」があれば、上記の「優劣」はなくなり、イコール(ないしはニアリー・イコール)となって、つまり②=(≒)①となり、理論的にコミュニケーションは完全化します。Aの立場である「通訳者」が、欧州言語参照枠の基準のB2能力以上であれば、然るべき「訓練」によって克服可能です。即ち、②>①→②=(≒)①

参考として母語話者間のメカニズムも見ておきましょう。



Aの立場から:

- ③ A: 母語ヴァリエント(語彙・文法など)で、B: 母語ヴァリエント(語彙・文法など)の理解を試み、解釈し、言い換えて標準語の「発話」をする。
- ④ B: 母語ヴァリエント(語彙・文法など)を、A: 母語ヴァリエント(語彙・文法など)で解釈し、B: 母語ヴァリエントの「発話」の意味を理解する。

「母語(第一使用言語)運用能力」の優劣差: ④>③[ないしは、④>③]

Bの立場から:

- ③ A: 母語ヴァリエント(語彙・文法など)を、B: 母語ヴァリエント(第一使用言語)(語彙・文法な

ど)で解釈し、A:母語ヴァリアントの「発話」の意味を理解する。

- ④ B:母語ヴァリアント(語彙・文法など)で、A:母語ヴァリアント(語彙・文法など)の理解を試み、解釈し、言い換えて標準語の「発話」をする。

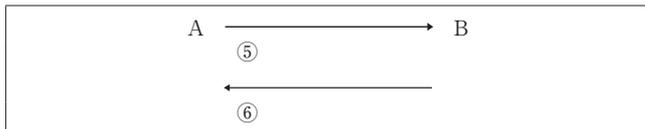
「母語(第一使用言語)運用能力」の優劣差:④<③[ないしは、④<③]

実は母語(第一使用言語)話者間で、初等教育機関における「標準的な」母語教育を受けていても、言語外的な要因(社会階層、教育レベル、地域差(方言)、年齢、性別、職業、趣味、生活習慣、価値観、思想など)によって、無意識にも「微妙な、場合によっては大きな」理解の妨げを生じてしまいます。

そこには、所謂「コミュニケーションギャップ」(例えば、行政と政治家それぞれの二枚舌による責任転嫁など)がよく見られます。

ここでは、それぞれの「発話」を標準語でとじていますが、相手の母語ヴァリアント、もしくはそれに近似する、共通認識可能な(歩み寄れる)「発話」が出来れば、相互に双方向「言語」運用能力が発揮・実現されて、コミュニケーションによる相互理解が成立することになります。

そこで、医療通訳者(A)と医療従事者(B)間のコミュニケーションを想定してみるとどうでしょうか?



医療通訳者(A)の立場から:

- ⑤ A:Medical Standard 語彙・文法などで、B:Medical Specific 語彙・文法などの理解を試み、解釈し、言い換えてA:Medical Standard 語彙・文法に基づく「発話」をする。
- ⑥ B:Medical Specific 語彙・文法などを、A:Medical Standard 語彙・文法などで解釈し、B:Medical Specific な「発話」の意味を理解する。

「医療言語運用能力」の優劣差:⑥>⑤

訓練によって⑥=⑤[ないしは、⑥≐⑤]

医療従事者(B)の立場から:

- ⑤ A:Medical Standard 語彙・文法などを、B:Medical Specific 語彙・文法などで解釈し、A:Medical Standard 語彙・文法に基づく「発話」の意味を理解する。
- ⑥ B:Medical Specific 語彙・文法などで、A:Standard Medical 語彙・文法などの理解を試み、解釈するも、職業意識の高さから、B:Medical Specific 語彙・文法に基づく「発話」をする。

「医療言語運用能力」の優劣差:⑥<⑤

医療従事者も、この優劣を解消するために、医療通訳者との遣り取りによって、その解消が実現可能であると考えます。

5 | グローバル・ジャパニーズの不可欠性

ところで、ヒトの言語と非言語メッセージの分裂的表現は他の動物にはない特徴になります。ヒトの「嬉し涙」はかなり普遍的ですが、悲しみの表現は、欧米系で、直情径行に拠る傾向がありますが、日本は「顔」で笑って、「心」で泣いてということがあります。国際結婚した新渡戸稲造(五千円札に顔写真)を皮肉った芥川龍之介の出世作の一つ(1916)「手巾(ハンケチ)」がありますので、是非「青空文庫」⁵⁾などで御覧下さい。

なお、「どんでん返し」の結末部分は、戦前の所謂「良妻賢母」を鑑とする女子教育の枠組みで、削除されましたが、戦後復元されました。

実は、没後100年になる夏目漱石が絶賛したこの作品の発表年1916年に触れたかったために言及しました。

ポルトガル語教育が日本で始まったのは、丁度100年前になります。

1908年初めて、日本人はブラジルへ移民し、その後、1925年日本政府は国家プロジェクトとして移民政策を位置付けました。移民とともに、ポルトガル語の学習が不可欠となり、1916年母校・東京外国語大学に新たな「ポルトガル・ブラジル語学科」が開設されることになりました。今年2016年はポルトガル語の教育が始まって100周年で、10月1日には母校で「国際シンポジウム」⁶⁾が開催され、私も登壇し、ポルトガル語による発題・講演の中で、以下の問題提起をしました。

「ポルトガルが抱えるグローバル・イングリッシュの外圧とグローバル・チャイニーズの脅威の狭間で、1990年以降来日する約20万人の日系ブラジル人と高等教育機関におけるかなりの人数に上るポルトガル語学習者数(毎年300名以上の卒業生)を考慮に入れて、ポルトガルは、自国言語文化の維持・発展・普及を日本のポルトガル語教育機関・学会に支援要請していますが、その立場は、ISOの提唱する「双方向外国語運用能力」の習得ではなく、従来の「外国語学習」の域に留まっています。私の見解は、日本としてはISOの国際基準確立の立場に立って、グローバル・ポーチューギーズの確立と同時にグローバル・ジャパニーズの確立も目指すべきと考えます」

ここで言う「グローバル・ジャパニーズ」とは、日本語のアルファベットは「ひらがな」とし、表記上、漢字、カタカナにすべて「ひらがな」ルビを附するというものです。これによって非漢字圏の国々の人々にも、広く「グローバル・ジャパニーズ」の学習・習得が容易となり、世界中で様々な日本語バリエーションが誕生することになります。今年3月モリスボン滞在中に出会った日本好きの大学生(22歳前後)は、映画「千と千尋の神隠し」で洗礼を受け、既に欧州で普及する全「ジブリ・コレクション」(音声:日本語、字幕:各国言語)を鑑賞し、「話し言葉(Vulgar Japanese)」の日本語は習得されていました。所謂コスプレ、キワモノ・アニメなどのファンも含め、一層の日本語・日本文化理解は進むものと思われます。

なお、「グローバル・ジャパニーズ」について、観光庁は推進派ですが、文科省は否定的です。その理由はワープロ普及で、日本人の漢字力が低下し、これによって、一層由々しい事態を招きかねない

という懸念を示しています。残念ながら、非常にドメスティックな発想です。

また、私も一時期まで、阪神大震災の折に導入された「やさしい日本語」の汎用性を評価し、外国籍住民のためのものではあったのですが、上記表記をすれば、通常の内容であれば、外国籍住民は、わざわざ「やさしい日本語」⁷⁾に言い換えなくても、理解できることが分かりました。

一方、「やさしい日本語」を通訳技術におけるパラフレーズする力(平易な表現への置き換え)と混同してしまっていたことにも気付きました。「家庭の医学」レベルの日本語に基づき、医療従事者の発話が、ゆっくり、平易に行なわれれば、事足りると感じるようになっていきます。

6 双方向外国語運用能力習得のための作法

通訳者は、普段から、医療分野に限らずに、後で触れる本来の「コミュニティ通訳」に含まれる領域: 行政・学校教育、司法・医療などの所謂「時事問題」に関する新聞記事などについて、10行程度の文章を外国語から日本語へ、日本語から外国語へ翻訳作業をすること、平易な会話言語(話し言葉)で練習することを進言します。出来れば、外国語ネイティブに協力をしてもらって、日本語から外国語の場合は、所謂流暢な言い回しで完成させるのが望ましいと思います。同じ目的を持った同士であれば、日本人であれば、日本語への翻訳については、そのネイティブに教えることができ、相互扶助的になります。なお、日本語の文章にせよ、外国語の文章にせよ、テキストで与えるのではなく、ヒアリングで聞き取り、書き取りから始めて、きちんと日本語・外国語の文章が記述されていることもチェックし、その上で日本語・外国語の文章に翻訳しましょう。母語話者が母語テキストのヒアリングをするのを軽視しないでおきましょう。これは重要なポイントで、先に述べた克服すべき「訓練」を指しています(上記「コミュニケーション・メカニズム考」: pp.88-90)。

7 再考：異文化コミュニケーション

私は複数大学で「異文化理解」「異文化コミュニケーション」(COデザインセンターでは「多文化サポート概論」)などを講義しています。「外国語学習」は一般的に学習言語への同化・統合が主眼で、従って学習言語から母語への運用能力が求められます。母語から学習言語への運用能力は、限定的に所謂「バイリンガル話者」によって、発揮されるものとされてきました。従来の絶対的価値観である「ネイティブ崇拜・信仰」がそこに生まれ、その時、後者の能力を補完するものとして、「異文化理解」「異文化コミュニケーション」の存在意義がありました。

ところが、グローバリゼーションによる「国際人流」が加速度的に深化し、非母語話者の「第一使用言語」が、母語話者による「母語」並みの可能性やそうした状況が生まれてきました。母語話者による本来の母語運用能力に対する危機感は、所謂「ナショナリズム」と結びついて、所与の「あるべき」ものとして、母語を尊重すべきものという考えを醸成することになりますが、その一方で、「地球市民(グローバル・シチズン)」によって初等教育機関で習得された「言語」は、彼/彼女の母語とは別に「第一使用言語」として、従来の母語話者による母語運用能力と何ら遜色なく、コミュニケーションがスムーズにはかられることになってきました。

そうすると、上記「外国語学習」に関する「一方向的な能力」の補完的な役割を果たした「異文化理解」「異文化コミュニケーション」の存在意義は変わらずあっても、第二義的なものにならざるを得ないこととなります。

それよりも、むしろISOが提唱する「双方向外国語運用能力」を備えた人材(地球市民)の育成が目下の急務で、その運用能力のバランスのとれた「正確性」が追求されてしかるべきです。

8 外国籍住民のための「日常的法情報」学習

なお、日本国内に限定して「第一使用言語=母語(日本語)」を考えると、正確には1990年入管法改正以降のことですが、日系中南米人とどまらず、世界中から日本に集まる労働者層=外国籍住民の子供たちの「第一使用言語」が日本語になる場合が増えていることを意味しています。

その理由は次のように考えられます。母社会の中で遅くサバイバルしてきた、ブラジル・サンパウロの日系人や大阪の在日韓国朝鮮人など、地域総人口に対するそれぞれの人口比割合、約5%を前提に、死語にならないための、言語・文化継承の最小単位2人という数字と、我々日本人にとって馴染みやすい「学校のクラス単位40人」を組み合わせた5%を便宜上「マイノリティーの最低限」と捉えています。

一般的に、日本の外国籍住民の(地域)総人口比の数字は5%にはるかに及ばないものです。総人口比で僅か1.6%、大都市圏東京3%、愛知2.7%、大阪2.3%です。

日本語が「第一使用言語」として日本の初等教育機関を過ごす、と、「第一使用言語」が確立される11歳前後に、外見は所謂「外国人」で、4歳までに母親を中心に伝えられた「母語」ではない「外国語」が「第一使用言語」として、所謂日本人の母語並みの「外国語運用能力」を身につけることとなります。それは同化ではなく、自然な社会的「統合」と看做すべきです。

さて、同一言語・文化圏において、ステレオタイプの「上層文化」と民衆的な「基層文化」に分けることができます。医療・司法語彙について、日常語で、「分かり易く」どういう単語になっているのか、また9言語で構成される大阪府国際交流財団(OFIX)版「大阪生活必携」にある「日常的法情報」

を出自国の「日常的法情報」との相違点を洗い出しておくのも有効だと考えます。本学・外国語学学部後期3-4年生の授業で日本語版と多言語版を対照的に学習させ、実効性のあるものです。

ただ、この資料は行政文書になり、後述する「コミュニティ通訳」分野をカバーしているもので、「双方向外国語運用能力」維持・発展させる練習の基礎になります（「双方向外国語運用能力習得のための作法」：p.92）。

また、「年齢、性別、職業、趣味、生活習慣、価値観、思想など」による文化的多様性がありますが、古典的な文献、ピーター・トラッドギル著、土田滋訳(1975)『言語と社会』：岩波書店(岩波新書・青版C-99)を一読すると同一言語・文化圏内の社会階層による言語的多様性がよく理解できると思います。

9 | 高コンテキストの文化・低コンテキストの文化 (1)

世間ではよく日本文化を「高コンテキストの文化」、英語圏を「低コンテキストの文化」と規定する言及を見かけますが、正しい「英語」を中心に語られる分け方で、「隣の芝生は美しい」の論理で、俗に入り易い「比較文化論」になります。上述のトラッドギル著『言語と社会』にあるように、各言語で、言語的社会階層は必ず存在し、語弊を恐れずに言えば、同一言語・文化圏内で「知識階層」ほど「低コンテキスト」の記述文法・発話になり、「大衆階層」ほど、「高コンテキスト」の慣習的・慣用的（場合によれば、破格）文法・発話になる傾向は強いです。

「グローバル・イングリッシュ」普及が喧しく叫ばれる昨今、「ネイティブ崇拜・信仰」（「再考：異文化コミュニケーション」：pp.92-93）の抜けない、高等学校のネイティブ教諭による教育現場で、主語なしなど余りにブロークンな英語教授に正当派の達者な英語話者・日本人教諭が軌道修正に苦慮されているのを聞くに付け、俗「比較文化論」信奉者には是非傾聴して欲しいと思います。

医療通訳について言えば、「高コンテキスト」か「低コンテキスト」か、いずれの場合も、contextual sensitivity（文脈を汲み取る感性）が肝心で、まず、高・低を見極め、専門的な医療用語・表現で通用する患者なのか、慣習的（慣用的）な医療用語で通用する患者なのかによって、「人を見て法を説く」と同様に、患者を見て、適切な対応を決める必要があります。

10 | 市井で使う医療用語

次のような事例があります。数年前、日本人看護師にBSは何の略記号が分かるかと問うたことがあり、どうしても、「低コンテキスト」の専門知：Blood Glucose Level（血糖値）が頭から離れず、こちら

が慣用的なBlood Sugarを指摘すると笑っていました。因みに、Rio五輪で、「Rio 2016」の文字ロゴ自体観光名所:Pão de Açúcar(砂糖パン、ブラジルで有名なスーパーマーケット店名)について、そこに含まれる単語açúcarを使って、血糖はポルトガル語で、慣用的にaçúcar no sangue(=逐語訳:sugar in the blood)、正式にglicose no sangue(=逐語訳:glucose in the blood)ということになります。

また日本語「耳下腺炎(オタフクかぜ)」など、各言語で「高コンテキスト」な慣用的語彙を知っておくのも有益です。英語はparotitis(専門用語)、mumps(原義:ふくれっ面)、ポルトガル語はparotidite(専門用語)、papeira<papear[(動詞:鳥が囀る)によって、例えば、南米産ハチドリ(beija-flor:花に接吻)の小さく可愛らしく両頬が瞬時に膨らむ様子]、caxumba<cá+chumbo ou chumbar[副詞:ここに+名詞:鉛、あるいは動詞:鉛が重く下がり、「ここに鉛が入っている」様子]。

一方、「はしか」は英語で、rubeola(印欧語起源)、Measles[ゲルマン系起源(=an infectious viral disease causing fever and a red rash on the skin, typically occurring in childhood.)]。ポルトガル語ではsarampo(中世イベリア・ラテン語(俗ラテン語)起源、原義:刺激腫症)⁹⁾

関連して、「風疹(=三日はしか)」は、英語では、rubella(=German measles or three-day measles)、ポルトガル語ではrubéola(= sarampo alemão)。

因みに、ラテン語でrubella, rubrum(赤い)に由来。上記ブラジル・リオの守護聖者セバステアヌスと同様の役割を果たす「ペスト除け」聖者ロクス(Rochus)も生誕の際、胸元に奇蹟的に「紅」十字架の刻印があったことからそう命名されています¹⁰⁾。

11 | 高コンテキストの文化・低コンテキストの文化 (2)

A「私の娘は男です」

B「私の娘は、前は男でしたが、今回は女でした」

という、出産に言及した「高コンテキスト」日本語発話の誇張した「分かり易い」典型例があります。

ただ「ノートテイキング」をきちんとすれば、誤り・誤解などは事前に修正可能です¹¹⁾。

ここでは、脱線して、日本語の「むすめ」「むすこ」の語源に関する豆知識を紹介しましょう。

古代語「う(産)むすひ(秘invisible=霊spirit)」に由来し、産まれてきた男が、「むすこ」、女が「むすめ」になります。火神の名で、御存じ「ほむすひ(火産秘=霊)」=カグツチ(かく様な[燃えたぎる]血visible=肉体body)。切っても切れない「火」の特性から、動詞「結ぶ」の語源にもなります。中世の一時期、結ぶ=掬ぶとなり、手を貝殻状にして水を「掬(すく)う」という動作を示していました。現代日本語では、動詞「結ぶ」にはそのような意味はありません。

元々、表意文字「菊」は「米を包み抱える」という意味で、中世時代、花卉が丸く咲く花をすべて「キ

ク」と命名し、「くさかんむり」を附して、漢字「菊」（漢音）は完成します。中国にあった「掬水月在手」という習慣が、中世日本で、縁側に水を張った盥（たらい）に月を映して「月見」を楽しむ習慣が誕生し、現代にまで至ります。紀貫之の名歌「袖ひちて掬（むす）びし水の凍（こほ）れるを春立つ今日（けふ）の風や解（と）くらむ」（百人一首にも含まれる）を知る人も多いでしょう。四季の流れを瞬時に、恰もタイムスリップしたかのように、詠んだ「現代性」は驚嘆に値します。

12 | ISO が望む人材育成の現実的理想論の二つのケース（1）

ISO（世界標準化機構）が望む人材育成の現実的理想論は、日本の場合、外国語学部を抱える公的高等教育機関＝総合大学において人材育成が、語学の運用能力も含めて、医療の専門的通訳技術などを習得させ、自己完結的になされることです。

社会人を対象にした「中之島医療通訳養成コース」（事務局：一般社団法人臨床医工情報学「コンソーシアム関西」）は、大阪大学が主催し、年間を通じて座学+病院実習をこなすもので、新設された一般社団法人「国際臨床医学会」によって、医療通訳者として「学会認証」されることで自己完結するものです。上記ISOの「対外的な」現実的理想論の実現化したものになっています。これが一番目のケースです。

コミュニティ通訳

さて、前後しますが、「コミュニティ通訳」研究・実践者である司法通訳専門家、ISO「通訳・翻訳の規格化」検討に関する日本の会議に学術研究者として唯一参加する水野真木子は、「コミュニティ通訳」をかく定義します：

《地域社会の中で暮らす外国人や移民（外国籍住民）が、その国の公式の言語を話せないことで公的サービスを受けられないようなことにならないよう、コミュニケーションの橋渡しをすることを目的とする通訳である。行政・教育など生活の様々な場面で「コミュニティ通訳」が必要とされるが、その分野としては、広義では司法・医療を含む。「言語権イコールアクセス権（基本的人権へのアクセス）」という理念がその基盤にある》

「中之島医療通訳養成コース」で事前に実施される所謂「足切り試験」を独立させたものが、必要となっています。「正規の」プロフェッショナル・コミュニティ通訳のための「双方向外国語運用能力認証検定試験」と言えます。

これまでの「外国語学習」に関して、欧州の場合、CEFR：Common European Framework of Reference for Languages（ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づく言語検定試験は、欧州域内で

研究留学・労働などを行なうためのもので、双方向能力が問われるものではなく、その対象言語習得度をはかるものです。日本における外国語学習も基本的に、「郷に入れば、郷に従え」で、When in Rome, do as the Romans do.(ローマに行けば、ローマ人になろう)です。

ISOが4年ほど前に「通訳・翻訳の規格化」を提唱した時に、国際基準に照らした「双方向外国語運用能力」の習得・認証がその主たる眼目となりました。一般的に、学習対象言語から母語(第一使用言語)への通訳・翻訳は、その逆よりも能力を高く発揮できるものの、やはり「双方向外国語運用能力」をバランスよく担保することは、例えば、海外での邦人救出などを想定した場合、国際基準に鑑みた「双方向外国語運用能力」認証人材をグローバルに登録しておけば、近隣であれば、その現場に向くことが可能であり、また遠隔地の場合には、遠隔通信によって、まず、現場での状況悪化、あるいは、病気の重症化などを未然に防止することができます。

ただ、これまで「双方向外国語運用能力」はバイリンガル話者でなければ、無理ではないかと思われてきました。しかし、CEFRによる能力(熟達度)別レベルが設定されており、6段階の「中上級」にあたるB2以上になれば、Interactiveでdeductive(演繹的:応用の効く)なレベルまで達し、Contextual Sensitivity(文脈を汲み取る感性)に拠って、「双方向外国語運用能力」は担保されると考えます。因みに、日本の大学設置審基準の「義務的」学習時間で、予・復習を含む約2,000時間を超える外国語学習時間によって、学習者母数の5%ほどが「双方向外国語運用能力」に達すると考えられます¹²⁾。

下の表はその時間数を中心にまとめたものです。外国語部系(4年間)の実質的な総学習時間数を2,025時間としているのがここで言う約2,000時間にあたります。注目していただきたいのは、中等教育課程(英語)総学習時間:1,885.2時間です。中学・高等学校(6年間)には大学設置審基準による自習時間の設定などありませんが、ここでは比較のために想定時間とし、合算したものです。日本人は英語を6年間学習しているのに一向に発話能力が身につけていないとよく批判されますが、それはこの数字が日本語から英語への発話能力が達成される臨界点にあることを示しています。実際、大阪府と公益財団法人大阪府国際交流財団は、大阪の国際競争力を強化するため、2011年10月、共同で大阪府国際化戦略実行委員会を設立し、大阪府国際化戦略アクションプログラムを策定して、高校生を対象に世界で活躍するグローバル人材の育成に取り組み始めました。林田も委員会メンバーを務めました。9か月間の週末の英語集中講義、2週間の英語圏研修などを経て、96名受講者のうち5%ほどが上記B2以上の能力に達し、海外進学(高等教育機関など)を可能にしています。この「臨界点」の実例にあたります。平たく言えば、目から鱗が落ちることです¹³⁾。

表まとめ: 数量根拠に基づく「外国語学習」を考える

	授業時間	自習時間(大学設置 審基準など)	修了単位要件総学 習時間数	留学による学習4,800時間加算 (1日16時間言語シャワー×300日)
日本の外国語学部系(4 年間): 1コマ=2h 上記実態: 1コマ=1.5h	900 675	1,800 1,350	2,700 2,025	7,500 6,825
ロシア旧東欧圏東洋学 部日本語科(5年間)	2,250	4,500	6,750(言語習得基 準参照値)	留学なし
欧州CEFR 言語検定試 験(上級) ALTE - <i>The Association of Language Testers of Europe</i> (現在27 言語)	900	1,800	2,700	7,500 CEFR: <i>Common European Framework of Reference for Languages</i> (ヨーロッパ言語共通参照枠)
ドイツへの移民に課さ れる「社会的統合」(言 語学習)CEFR中級	600	1,200	1,800	6,600(みなし留学) IATE: http://iate.europa.eu/iateDiff/SearchByQuery.Load.do?jsessionId=9ea7991c30d776f4a7804d384e8db3b3bcf695605863.e31LbNeKc38Kc3eKaNIILaNO1b40?method=load
小学校~大学までの英 語学習	736.4	1472.8	2,209.2	7,009.2
中等教育課程(英語)	628.4	1,256.8	1,885.2	6,685.2
日本の大学英文科(4年 間)	900 675	1,800 1,350	2,700 2,025	9,385.2(+6,685.2) 8,710.2(+6,685.2)

作成者: 林田雅至

13 ISO が望む人材育成の現実的理想論の二つのケース (2)

「正規の」プロフェッショナル・コミュニティ通訳になるためには、「双方向外国語運用能力認証検定試験」(「中之島医療通訳養成コース」はそれに対応する「事前足切り試験」)によって評価・認証され(必要条件)、それぞれの専門分野の「公的」機関による講座(医療分野は「中之島医療通訳養成コース」を大学教育課程に組み込んだものを想定)などを受講学習した上で、通訳技術・専門知識試験の合格を以って、専門的通訳認証(十分条件)を受ける必要があります。この2つの条件を満たして、初めて正式な「コミュニティ通訳」となります。

言い換えれば、「中之島医療通訳養成コース」を大学院「通訳・翻訳学コース」(仮)に組み込んで、国内で唯一「外国語学部」を抱える国立大学法人・大阪大学が主体として、その成績評価を以って、必要・十分条件を満たす「医療通訳認証」を行なう社会的任務、大きく言えば、グローバル社会のニーズに応える任務を担うことによって、上記ISOの期待する趣旨を満たすものと考えます。これが、「現実的理想論」の第二番目のケースになります。

14 | エピローグ～抱える問題

ただ、両案について、共通する懸案事項は経済自立に関わる問題で、国家資格「社会福祉士」を取得し、メディカル・ソーシャル・ワーカーとして、自治体、病院などに就業機会を求めるとか、国家資格「衛生管理者」を取得し、多言語ヘルス・スーパーバイザーとして、民間企業の人事部付きで配属されるといった可能性があります。¹⁴⁾

最終的に経済自立の問題が決着する方向性が見出せた時、Medical Linguisticsは現実的にOpen Innovationに繋がることになると思います。

ところで、今年度「中之島医療通訳育成コース」受講生の一人は米国就職が見込まれており、修了証書の英語版発行を求めています。また昨年度受講したフィンランド人(フィンランド・コミュニティー通訳(フィンランド語・日本語の双方向外国語運用能力者)国家資格取得)もフィンランド帰国後、英語版を同様に受け取ることになります。この英語版証書の発行は既にコースが米国とEUで実質的に「グローバル化」している証しになります。

また、「中之島医療通訳養成コース」は、参考事例ながら、ISOの意向に沿うアカデミアの「鑑」と判断される見込みで、「エクステンション」講座という学外・外付けの現状でも、実質上、「国際認証」(総長署名)を授与していることになります。ISO曰く、「公的」高等教育機関で医学部+外国語学部の連携で、授業+証書(認証)を出すことが理想と謳っています。今年2年目が終了し、今後5年ほどの実績を重ね、うまく学内授業に取り込まれれば、理想が現実となります。

なお、こうした経緯を受けて、2016年12月21日外国語学部・医学部学生を「中心」とするMedical Linguistics Innovation研究会(林田雅至主宰)が本格的に発足し、初回研究会タイトルは「Medical Linguistics for Open Innovation」となりました。外部から、ナレッジサロン「高度外国語交渉」能力に長けた印南敬介(プロデューサー補佐職)も参加し、interactive competenceについて積極的に発言しました。彼はナレッジサロン発足以来、4年間で90件に及ぶ、「双方向外国語運用能力」に立脚した交渉を重ねています。今後、Technological&Medical Linguistics領域の「総合コーディネーター」を目標にさせて、鋭意指導を積み重ねています¹⁵⁾。

さらに、2016年12月14日「医療・健康イノベーション学」(豊中大講義室、16:20-17:50)ではロシア語司法・医療通訳教材開発者の加藤純子(外国語学部)と印南敬介との共同プレゼンテーションを行ないました。とりわけ、印南敬介による加藤純子の講義筆録(ホワイトボードに直接記述)は、「双方向外国語運用能力」を身に付ける第一歩で、母語の聞き力、書き取る力の実演となりました。また、加藤純子は昨年共同開発した医療アプリケーションについて、辞書機能を強調した概要説明を行ないました¹⁶⁾。

さて研究会は今後、定期的な開催を目指しており、繰り返しますが、Interactive competenceの第一歩は、母語(日本語)の聞きとり、書き取りで正確に内容を理解・解釈できるかにあります。その訓練

は非常に意味のあることです。

中学校・高等学校及び大学の外国語学習においても、また大学の教養課程の論文作成能力涵養(日本語作文力学習)においても、高度汎用性の高い、実は地味な母語の聞き取り、書き取り作業は、グローバル・イングリッシュを喧しく啓発する予備段階として、極めて重要な「知的営為」とであると確信します。

11歳前後の所謂「母語形成期」は、話し言葉(informal)「母語形成期」で、小学校高学年、中等教育課程で身に付けるものを、書き言葉(formal)「母語形成期」とすれば、その二つが一人格に同居・共存して、理論的には、個々人の「話し言葉」文体、「書き言葉」文体は年齢を重ねて、両者が緋い交ぜになり、練られ、収斂・昇華されていきます。両方の文体が個人の言語(発話)的「個性・特性・くせ・らしさなど」を構築していきます。ただ昨今のIT技術の負の所産で、両文体のバランスが悪くなり、とりわけ「書き言葉」文体の後退現象には目に余るものがあります。120文字では両文体を対峙させることは出来ず、あつと言う間に短絡的「話し言葉」文体が支配的になり、自己の客観的視点を失って、即ち論理的思考力を後退させて、例えば、One Word Politicsや押し売り(おれおれ詐欺もそのヴァリエーション)などの誘惑に「た易く」誘導されます。10年ほど前、百家争鳴であった「メディア・リテラシー」の前段階と位置付けられるこの「知的営為」を如何に身に付けるかが焦眉の課題と言えそうです。繰り返しますが、母語「書き言葉」のヒアリング、書き取り作業は最重要の鍛錬——絵画のデッサン、楽器などの練習曲の「演奏」——になってきました。

註

- 1) 林田雅至(2014)「序文」守山敏樹(監修)、林田雅至(外国語監修)『指して伝える!外国語診療ブック、問診から生活指導まで症状別に対応』南江堂。
- 2) 参考:拙稿(2012)「医療をめぐるLanguage Barrier Free～ことばの壁を越える～」(<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/2012/000473.php>)
- 3) アルメニア人カロウステ・ゲルベンキアンは1955年リスボンに遊学し、大変に気に入ったために、利益の1%を投資して、今や欧州で有数の財団法人を創立した。
- 4) イエスの家族はイエス誕生から8日目ユダヤ教会堂へお宮参りをするが、その折、司祭は、幼子イエスを抱きかかえながら、この子が成人すると、母マリアは胸を剣で刺し貫かれる深い苦しみを味わうと預言する。その時の聖母マリアは「苦しみの聖母マリア」と命名された。
- 5) 「青空文庫」:http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/43_15268.html
- 6) ボルトガル大使館広報:<http://embaixadadeportugal.jp/jp/100anostufs/>
- 7) 参考:「やさしい日本語」:[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%84%E3%81%95%E3%81%97%E3%81%84%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E_\(%E8%A8%80%E8%AA%9E\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%84%E3%81%95%E3%81%97%E3%81%84%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E_(%E8%A8%80%E8%AA%9E))
- 8) 大阪府国際交流財団(OFIX)版「大阪生活必携」:
<http://www.ofix.or.jp/life/hikkei/japanese/pdf/2.pdf>

9) 以下のようなサイトを閲覧するのも知見を深められるでしょう。

参考:

The measles & Rubella Initiative is a global partnership to dramatically reduce mortality rates for these deadly diseases: <http://measlesrubellainitiative.org/>

10) 拙稿(2008)「活動情報」: <http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/mashayas/activity/view/175.html>

11) 参考:厚労省編(2014)「医療通訳」:177.

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000057158.pdf>

12) ここでは根拠資料を示しています。双方向外国語運用能力認証にかかわる、外国語学部「学生便覧」に基づく資料

外国語学部実習科目:

1. 4年までに17コマ設定語科:1(ロシア語科) [内訳:1、2年生:6コマずつ+3、4年生:5コマ] =1.5時間×30週×17コマ=765時間+1,530時間(予・復習) = 2,295時間 +4,800時間 [1年間留学:16時間×300日] = 7,095時間 [総学習時間:4年+1年] ...全語科の4%

2. 4年までに16コマ設定語科:1(中国語科) [内訳:1、2年生:6コマずつ+3、4年生:4コマ] =1.5時間×30週×16コマ=720時間+1,440時間(予・復習) = 2,160時間 +4,800時間 [1年間留学:16時間×300日] = 6,960時間 [総学習時間:4年+1年] ...全語科の4%

3. 4年までに14コマ設定語科:3(ベトナム語科、英語科、スペイン語科) [内訳:1、2年生:5コマずつ+3、4年生:4コマ] =1.5時間×30週×14コマ=630時間+1,260時間(予・復習) = 1,890時間 +4,800時間 [1年間留学:16時間×300日] = 6,690時間 [総学習時間:4年+1年] ...全語科の12%

4. 4年までに13コマ設定語科:2(タイ語科、ハンガリー語科) [内訳:1、2年生:5コマずつ+3、4年生:3コマ] =1.5時間×30週×13コマ=585時間+1,170時間(予・復習) = 1,755時間 +4,800時間 [1年間留学:16時間×300日] = 6,555時間 [総学習時間:4年+1年] ...全語科の8%

5. 4年までに12コマ設定語科:18(朝鮮語科・日本語科・独伊仏各語科など) [内訳:1、2年生:5コマずつ+3、4年生:2コマ] =1.5時間×30週×12コマ=540時間+1,080時間(予・復習) = 1,620時間 +4,800時間 [1年間留学:16時間×300日] = 6,420時間 [総学習時間:4年+1年] ...全語科の72%

資料「表まとめ:数量根拠に基づく「外国語学習」を考える」の時間数では、15コマ(想定)の学習時間を例示しています。また、1から5までの留学を見込んだ平均総学習時間:6,744時間÷6,750時間(ロシア旧東欧圏東洋学部日本語科:5年間:週10コマ×1.5時間×30週×5年間+4,500時間(予・復習))=6,750時間)

13) 参考:大阪グローバル塾(独立行政法人:日本学生支援機構、2014年4月):

http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2015/11/

[18/201404yoshimurakeiji.pdf](#)

14) 社会福祉士 : <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%A6%8F%E7%A5%89%E5%A3%AB>

衛生管理者 : <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A1%9B%E7%94%9F%E7%AE%A1%E7%90%86%E8%80%85>

15) 昨年6月末で廃止された所属先 CSCD「10周年記念刊行物」の中で、教え子今枝崇（昨年度中之島医療通訳養成コース受講、2015年度卒業、製薬会社就職）及び印南敬介のことはp.108-117に記述があります。

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/CSCD/volume/cscdt1.html>

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/55655/1/cdob_t1_108.pdf

16) 参考：医療アプリケーション（2016）：

<https://itunes.apple.com/jp/app/id1082239890>

参考文献：

林田雅至（2016）「目指せ!多言語コミュニケーション・デザイナー」『Communication-Design 2005-2015』（10周年記念刊行）：108 - 117。

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/55655/1/cdob_t1_108.pdf

林田雅至（2011）「序論：日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ!」

『Communication-Design』5：21-30。

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/4701/1/cdob_05_021.pdf

関連:ISO 13611 Interpreting - Community interpreting - Guidelines (Published December2014):

<https://www.iso.org/obp/ui/#iso:std:iso:13611:ed-1:v1:en>